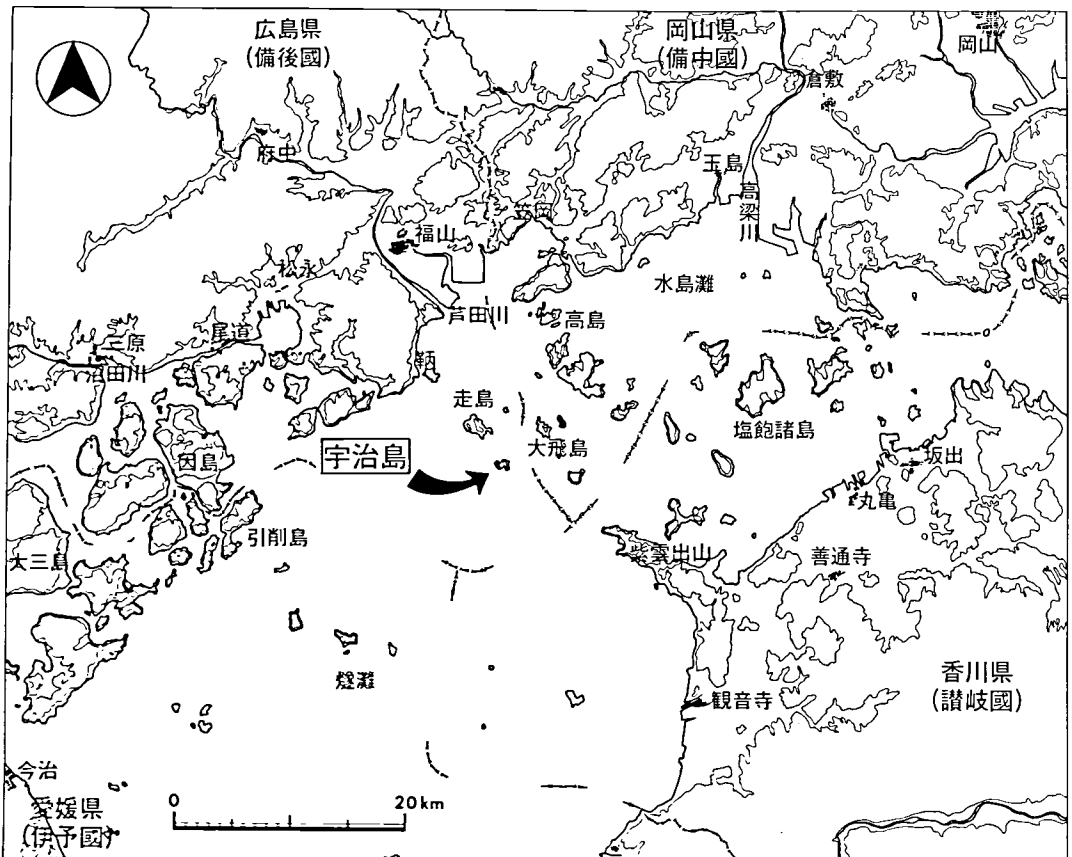


## 福山市宇治島北の浜遺跡の第1次発掘調査

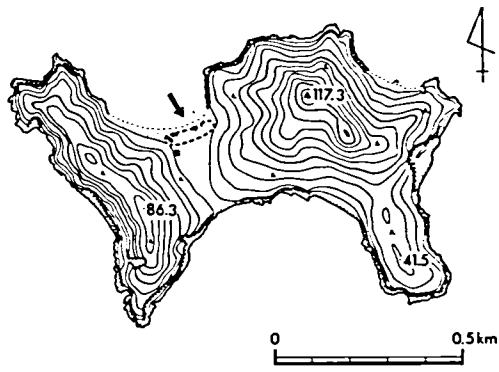
川越哲志・古瀬清秀・小池伸彦・  
小沢 毅・入倉徳裕・鈴木康之・  
藤井孝章

### 1. 遺跡の概要と調査の経過

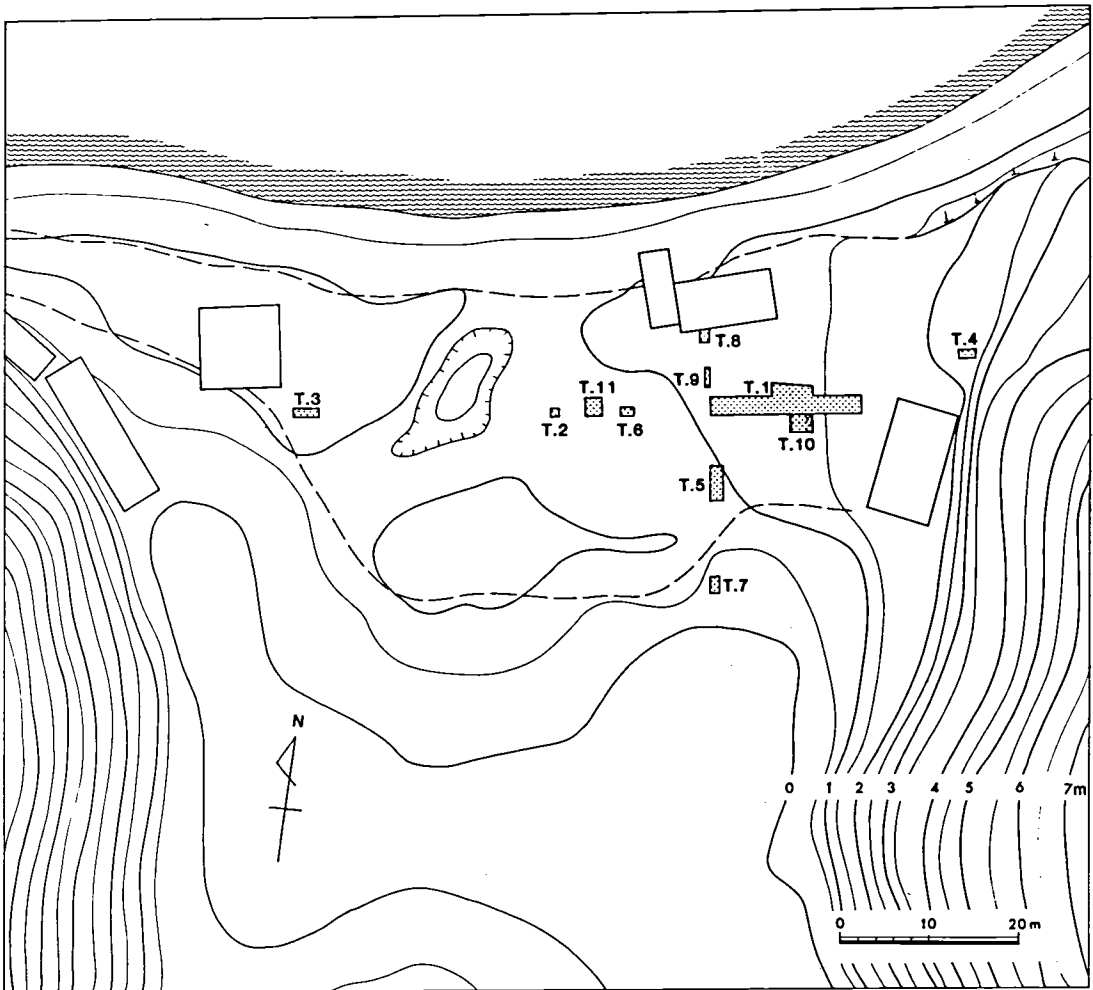
宇治島北の浜遺跡は、福山市走島町宇治島にある。宇治島は沼隈半島の靫と四国・三崎半島のほぼ中間にあり、塩飽諸島から燧灘へ抜ける西端に位置している。周囲約4.25kmの現在は無人の小島であり、北方2.5kmに走島、北東4.6kmに大飛島がある(第1図)。遺跡は宇治島の北側の小さな湾入した浜堤であり、昨年までは宇治島遺跡として紹介してきたが、この浜が、付近の漁師たちによって「北の浜」と通称されているところから、今後宇治島「北の浜遺跡」と呼ぶことにしたい。宇治島の概況や遺跡周辺の状況については、昨年度の資料紹介の折に報告したのでこれにゆずるが、遺跡の範囲は、この浜堤部分と、東西の山にとりつくやや高みの部分を含めて、東西90m、南北35mの範囲で、浜堤自体は弧状をなし、中央部がもっとも幅広で35m、東側の山への取り付け部で30m、西側へは三日月状に細くなっている。浜堤中央での標高98cmで、浜堤の最高所は中央よりやや南西隅で1.45mで



第1図 宇治島とその周辺



第2図 宇治島と北の浜遺跡 (破線内・矢印)



第3図 宇治島北の浜遺跡地形図 (アミ目はトレンチ)

ある。浜堤の背後の南側は一段低くなって低湿地となっており、標高-30 cmとなっている。かつては奥深く湾入していたものが、潮流と季節風とによって東側の山の崩落したマサ土と共に砂を運び、東西から次第に浜堤を形成してゆき、湾の入口を封鎖したものであり、東側からゆるやかなスロープになっていることもこれを裏づけるものであろう。なお、浜堤の中央よりやや西寄りに18×8 mの長楕円形の陥没孔（深さ60 cm）がみられるが、何に由来するか不明である。

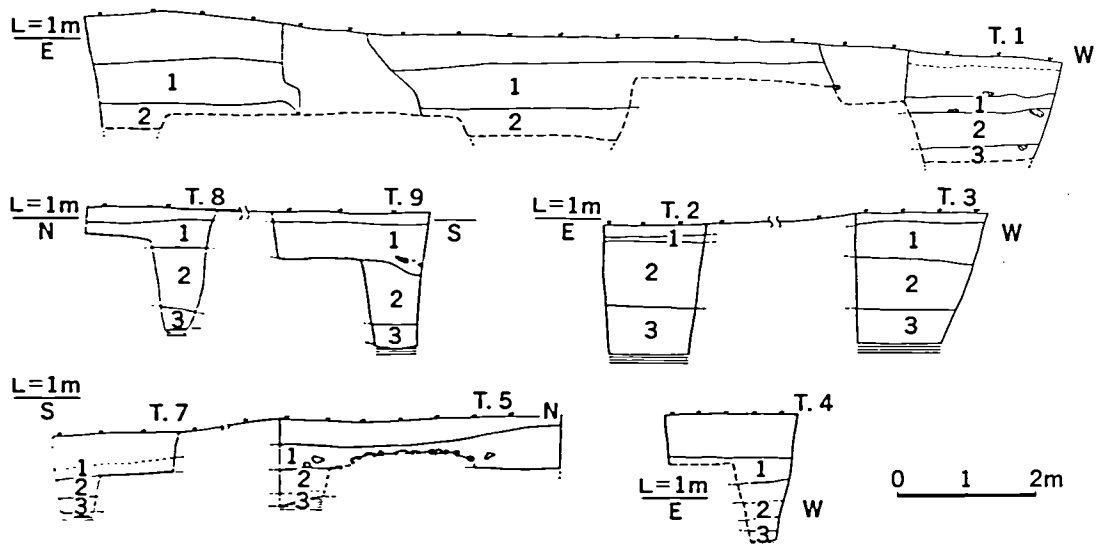
昭和57年11月7日の予備調査の結果から、縄文時代～平安時代にいたる大遺跡であるらしいことが推測されたため、潮見浩教授の指揮・指導の下に内海文化研究室の考古学班の昭和58年度の研究調査地として選定し、遺跡の正確な節囲、時期、性格をあきらかにするため、発掘調査をおこなうことにし、昭和58年10月3日～10月13日までの10日間、走島唐船漁港に宿泊して毎日船で宇治島へ通って発掘調査を実施した。

調査参加者は川越哲志・古瀬清秀・小池伸彦（広大大学院 D.C.）・藤井孝章（広大大学院 M.C.）・妹尾有規子・中摩浩太郎（広大三年）のほか、香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館松本敏三氏・同岩橋 孝氏・香川大学教育学部助教授丹羽佑一氏が途中参加され、10月7日には悪天候について潮見浩教授・松下正司（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所々長）・赤塚弘光（福山市教育委員会文化課々長）・園尾裕・柴田信次（福山市教育委員会）・佐藤昭嗣（神辺町教育委員会）の諸氏が来島、調査指導・協力を得た。（川越）

## 2. 包含層の状況と遺構

遺跡地の遺物包含および遺構の状態を把握するために、浜堤平坦面の東半部を中心に11カ所にトレンチ（第3図）を設けた。この結果、基本的には3層の堆積層で形成されていることが判明した（第4図）。もっとも平均的で良好な層序を示す第9トレンチでみると、攪乱された厚い表層が存在するトレンチもみられるが、表層20～30 cmの下位は50～70 cmの第1層（黒褐色砂質土層）が堆積している。この層はきめ細かな砂質土で、遺物を多く包含する。第2層（暗黄褐色砂層）は第1層と明瞭に区分できる。第1層に比較して黄褐色化し、砂の含有が多くなる。平均95 cmの厚さがあり、下位になるにしたがって白味を増し、砂粒も粗くなるが、固くしまっている。第3層は黄褐色砂層で、5 mm前後の砂粒を多く含む粗い砂層である。30～35 cmの厚さがあり、この下が岩盤となる。

この第9トレンチでみられた層序は設定したすべてのトレンチにほぼ共通する。ただ、浜堤中央部



第4図 宇治島、北の浜遺物包含層実測図（数字はトレンチの番号、アルファベットは方向を示す）

は全体に凹んでおり、第1層が極めて薄くなっている。これは浜堤中央部が常に風および波浪の影響を受けやすく、第1層を含む表層が後背湿地側に移動したためと考えられる。周辺部に設けた各トレンチの状態をみると、東辺の第4トレンチでは依然として包含遺物量は多く、層序も厚い。しかしながら山脚に近く、遺跡地の東限に近いとみられる。南辺の第7トレンチは後背湿地への傾斜面にあたるが、包含層も薄くなり、包含遺物は極めて少ない。遺跡地の南限を示す。北辺に近い第8トレンチでは隣接する第9トレンチにほぼ対応する包含層が認められるが、遺物量は少ない。西辺の第3トレンチは包含層もしっかりしており、遺物量も豊富である。遺跡地はなお西方にのびるものとみられる。

次に包含遺物をみると、第1層では、上面付近から土師器（高台付杯・皿、甕など）、須恵器（高台付杯、甕など）、製塩土器（厚手丸底型式）など、中位から主として古墳時代後半期に属する土師器、須恵器、製塩土器（薄手尖底型式）、土錘など、下面付近から古墳時代前半期に属する土師器などが出土している。第2層では、縄文時代後・晩期に属する土器・石器などが主体で、下面付近で中期土器がまばらに分布している。第3層は全くの無遺物層である。

遺跡地全体の遺物の出土状態をみると、浜堤東半部は中世～古代、古墳時代後半期、縄文時代後・晩期の遺物出土量が多い。浜堤中央部では第1層が削平されており、包含状態は不明であるが、第2層では縄文時代遺物が多い。浜堤西半部では第1層の包含遺物に古墳時代初期に属する遺物が含まれるが、他の調査区では当該期の遺物が僅少である。

遺構としては、浜堤東半部の第5トレンチで集石遺構を検出した。拳～小児頭大の礫を中央にやや高く、1～3段ほどに集積したもので、幅約1.8m・中央部の高さ約30cmである。南西-北東方向に主



第5図 第1トレンチ 1層上面遺物出土状況 (Aは三彩, Bは緑釉陶器片, アミ目は石)

軸をもち、トレンチの両側にさらに延びているが、全容を把握していないので、遺構としての性格は不明である。隙間から出土する遺物には土師器(竈を含む)、須恵器などがある。古墳時代後期に属する遺構とみられる。

また第1トレンチでは第1層の上面より5～10cmに、遺構としてはとらえられないものの、ほぼ同一平面約16㎡の範囲に鎌倉時代に属する土師質土器・瓦器、平安時代～奈良時代後半に属する土師器・須恵器・施釉陶器(三彩・緑釉・灰釉陶器)・銅銭(神功開宝)などが分布している(第5図)。各時期の遺物はほぼ限定された範囲に、層位的に区分が困難な状況で出土しており、遺物分布の中心部には70×35cmの一抱えほどの石があり、この石は、この遺物群の中でなんらかの役割を担っているとみられる。また、少なくとも奈良時代の施釉陶器を含む遺物群は、ここでなんらかの祭祀的行為がなされたことを示している。日常雑器類としての土師器・須恵器、生産用具(製塩土器・漁具)などは、明らかにこの遺物群の分布する面より層位的に下位になる。

なお、他のトレンチでは遺構の存在を示す遺物の出土状態、包含層の堆積状態は確認できていない。

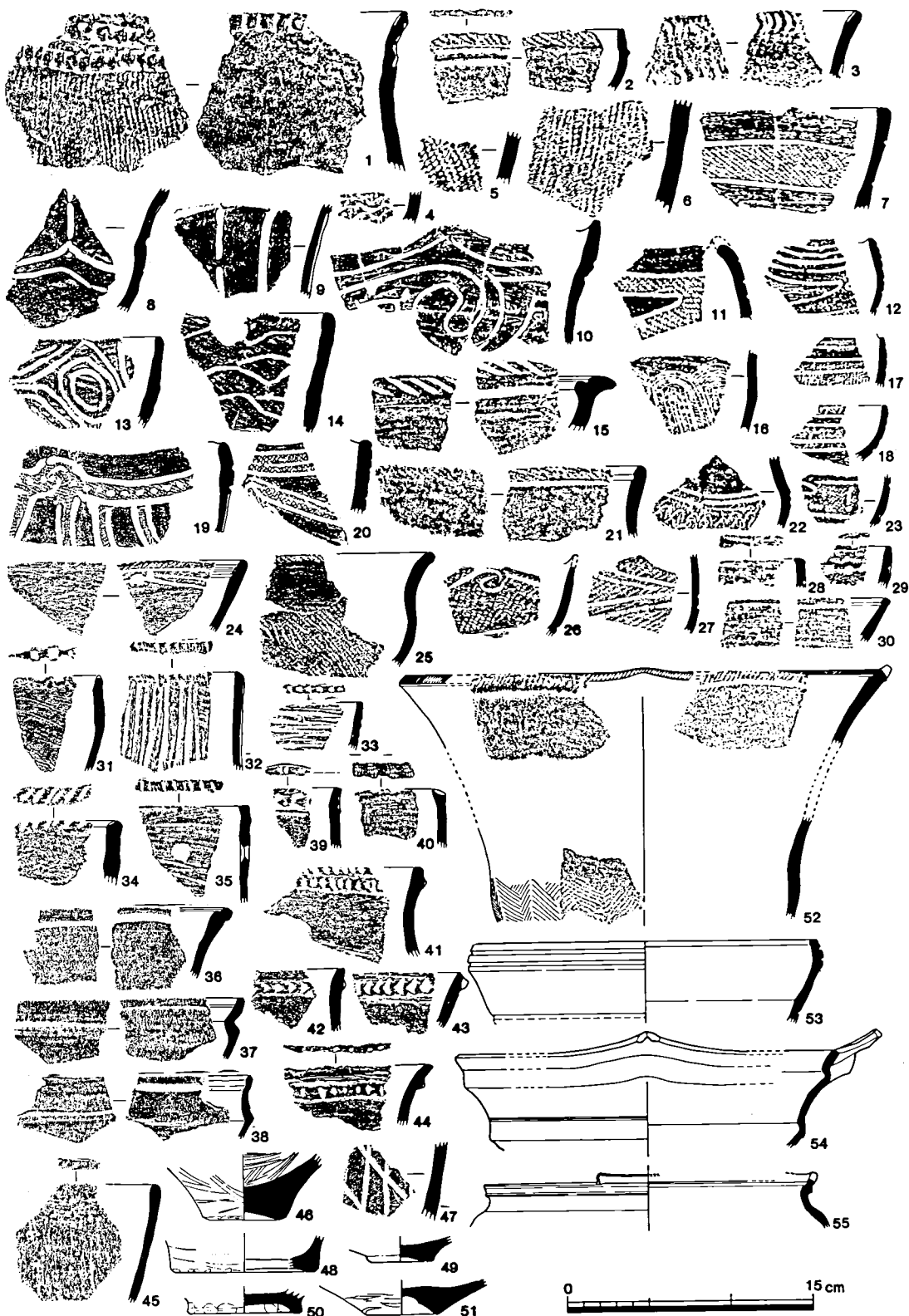
(古瀬)

### 3. 出土遺物

#### 1) 縄文式土器(第6図)

中期の縄文式土器(1～6) 1はやや大きめの縦位の縄文地にC字形の爪形文を口縁下に2列、口縁内側に1列配する。器壁の厚い深鉢形で、焼きが良く赤褐色、中位の砂粒を含み内面には指頭痕を残し、なで調整される。口縁内面に縄文帯をもたないことからすると、船元Ⅱ式。11-2層出土。3は深鉢形の口縁部で、内面上端と口縁下に逆C字形爪形文を施す。内外なで調整。暗黄褐色。焼成良好で石英砂粒を含む。船元Ⅱ式。4は深鉢形土器胴部片で粗い縄文地に爪形文を縦に施す。焼成は良く、灰褐色、胎土には砂粒を含む。内面はへらによるなで調整。1-2層出土。船元式。2はキャリパー状の深鉢形土器口縁部で、船元Ⅱ式とされるもの。1-2層下出土で焼成はよく、暗黄褐色の胎土には細かな砂粒を多く含む。磨滅が著しいが口縁内外及び口唇部に縄文を施し、口縁下に1条凸帯を貼りつける。凸帯の上下は押し引き状に爪形文がつく。5, 6はともに船元式土器の胴部片で、地文の縄文のみが認められる。5は1-2層下出土で黄褐色を呈し、焼きは甘く内面に擦痕がある。6は赤褐色の胎土に砂粒を多く含み器壁は厚い。縄文は一部つぶれてやや粗雑な感じを与える。内面には擦痕がある。2-2層出土。

後期の縄文式土器(7～36, 40, 52～53) 8は深鉢形土器胴部片。内外とも横なで調整がみられ、太めの沈線文を配する。灰褐色で大粒の砂粒を含むが焼成はよく、胎土も密である。文様構成が不明であるが、中津式としてよいであろう。1-2層下出土。9は深鉢形土器胴部片で、横位の擦痕の上に深く幅の広い縦位の沈線と短沈線が刻まれる。内面には擦痕があり、灰褐色で焼成のよい密な胎土である。中津式。1-2層下出土。14は2-2層出土の深鉢形沈線文土器口縁部である。外面擦痕で、粗く沈線を配し、内面は条痕の上を軽くなでる。赤褐色でやや厚手、焼成甘く胎土も粗く、中小の砂粒を多く含む。中津式。10は波状口縁の深鉢形土器口縁部で、波頭部がやや肥厚する。内外ともへらによるなで、やや太い沈線文を配する。1-2層下出土。橙灰～灰褐色で大粒の砂粒を含むが胎土は密。焼きもよい。中津式。13も沈線文深鉢形土器口縁部。褐色の胎土には大粒の石英粒が含まれ焼成がよく、外面条痕調整、内面はへらによるなで調整がされる。3-2層出土。中津式。7・11は磨消縄文土器口縁部。7は深鉢形、灰褐色で焼成は堅く密な胎土には細かな砂粒を無数に含む。外面はていねいなへら磨き、内側も磨かれるが比較的粗雑である。1-2層出土。11はやや内湾する波状口縁鉢形土器。波頭部を失う。外面へら磨き、内面なで調整、暗褐色で焼きは堅く、中位の砂粒を含むが胎土は密である。中津式。1-2層出土。19・20は鉢形波状口縁の磨消縄文土器口縁部。19は口唇部がわずかに肥厚し直下に2本の入組文が水平にのび、その間の縄文帯には直径5mmの円形刺突が施される。さら



第6図 縄文式土器

に2本沈線の磨消縄文帯がそこから垂下する。縄文帯上は丹塗される。黒褐色で焼成堅く胎土も密、内外ともヘラでていねいに磨かれる精製品である。11-2層出土。福田K II式。20は口縁下に3本沈線の文様帯があり、その下に3本沈線の入組文が配される。黄褐色で焼成は良く、表裏ともヘラ磨きされるが、裏面には擦痕を残す粗い磨きとなっている。1-2層出土で福田K II式。24は鉢形土器口縁部。外面はヘラによる条痕調整、口縁内側は巻貝刺突文を中心にして左右へ3本の沈線がのびる。上2段が磨消縄文帯となる。内面なで調整。1-2層上～中出土で福田K II式であろう。15は褐色を呈し、密な胎土で焼成もよく、内外ともなで調整される。浅鉢形で口縁部が著しく外反して口唇部が肥厚し、その上面に沈線と斜めの短沈線を配する。津雲上層式。第3トレンチ出土であるが層位は不明。16は深鉢形土器の胴部片である。黄褐色の胎土には細かな砂粒が多数含まれ、焼成は良好。条痕調整の上から半截竹管文を流水文風に縦に配し、肩から上部はヘラにより磨かれる。裏面は擦痕をとどめ、ヘラによるなで調整である。1-2層上出土。彦崎K I式であろう。25・21は鉢形ないし深鉢形土器の口縁部で、頸部をヘラで磨く磨消縄文土器である。25は灰褐～灰黄褐色、焼成良好で、内面もていねいにヘラ磨きされる。1-2層出土。21は磨滅しているが口縁上端の内外に細い縄文帯を配し、内側は沈線によって区画される。表裏ともヘラで磨かれ、暗黄褐色、1～2mmの砂粒を含み焼成は良い。1-2層出土。これらは共に彦崎K II式。26は波頭部を欠いているが波状口縁鉢形土器の口縁部。黒褐色で焼きは良く、胎土には中くらいの砂粒を含む。内面はヘラによる粗い調整、外面は縄文地に沈線文をいれて波頭部直下で逆「の」字状の渦文としている。彦崎K II式であろう。1-2層出土。12は内湾する口縁をもつ鉢形土器口縁部。上部に3条の細い縄文帯があり、中央に雲文状の縄文帯を配する。黄褐色、内面はなで調整で焼成は良く、胎土には小さな砂粒を含む。彦崎K II式であろう。11-2層出土。17・23・27は粗い縄文を施し数本の沈線を配し、沈線内に刺突文をいれる磨消縄文土器である。17は波状口縁の鉢形土器口縁部。内面はていねいに磨かれ、黒褐色、密な胎土で焼成は堅い。11-2層出土、彦崎K II式。23は暗褐色を呈する鉢形土器胴部片で胎土は粗いが焼成は良く、内面もていねいにヘラ磨きされる。4-4層出土。彦崎K II式。27も鉢ないし深鉢形土器の胴部片。外面黒褐色、内面黄褐色で胎土は細密、焼きも堅い。内側はヘラによるなで調整。これも彦崎K II式。6-2層出土。18・22はやや粗い縄文地に沈線を配した磨消縄文土器片で、縄文に特徴がある。共に11-2層出土。18は鉢形土器口縁部で内面ヘラ磨き、焼成は堅く胎土の密な灰褐色のもの。彦崎K II式。22は深鉢形土器胴部片で、肩部に2条の界線がつく。頸部及び内面はヘラで磨かれる。黒褐色の堅い焼きで砂粒をわずかに含む密な胎土である。彦崎K II式。52は11-2層出土の深鉢形磨消縄文土器口縁部及び胴部片である。淡褐色で焼きは甘く、中小の砂粒を胎土に含む。外反する口縁部は低い波状をなすが波頭数は不明。口縁部の残りからみて2単位の可能性がある。口縁内外に細い縄文帯胴部に羽状縄文帯を配する。口縁内側の縄文帯下に沈線がつき界線となる。縄文は細くこまかい撚りの無節縄文。外面は粗いヘラ磨き、内面はヘラによるなで調整で平滑に仕上げる。彦崎K II式である。28・29・30は巻貝を口縁部にころがして細い擬似縄文帯としているもので、鉢形あるいは深鉢形土器口縁部である。いずれも磨滅の著しい小片。28・29は11-2層出土品で黄褐色を呈し焼きは甘い。擬似縄文帯下に巻貝による刺突文を水平に配し、口唇にも擬似縄文を施す。内面なで調整。いずれも粗い胎土で29は石英砂粒を多く含む。30は口縁内側に沈線で界線をいれて細い縄文帯としているが、擬似縄文はそこをはみ出している。赤褐色の粗い胎土で焼成は甘い。4-2層出土。これら3片は彦崎K II式である。53は鉢形土器口縁部で全周1/4が残り、復元口縁外径21.8cmを計る。口縁直下に2本の沈線、頸部に1本の沈線が配され、外面は条痕の上をヘラでなで平滑に仕上げ、内面はなで調整される。暗褐～灰褐色で比較的密な胎土であり焼きも堅い。1-2層出土。彦崎K II式。31～35は口唇部に刻目をめぐらす深鉢形土器口縁部である。31は外面擦痕、内面なで調整、胎土は密で焼きは良い。11-2層出土。32は1-2層上～中出土。横の条痕地に縦に深く条痕が刻まれる。暗褐色、焼きが堅く、胎土は粗い。中小の砂粒を多く含むザラザラする。33は淡黄褐色で焼成は良く胎土には黒ウンモを含む。外面は粗い条痕調整、内面は擦痕がある。1-2層上出土。34は斜行する短線状の刻目が刻まれ、

黄褐色で胎土には砂粒が多く焼きは甘い。磨滅のため調整は不明。第3トレンチ出土。35は1-1層出土。黄灰褐色、中小の砂粒を多く含むが堅い焼き。外面はヘラによる条痕、内面はなで調整で、口縁下に焼成後の穿孔がある。これらはいずれも後期に属するのであろうが、31・33・35は中津式であろうか。40は11-2層出土。橙黄褐色の胎土は粗く、大きめの砂粒を含み焼きも甘い。外面は条痕、内面なで調整。口唇の刻目には巻貝圧痕があり、これは月崎遺跡など本州西端の後期後半の時期に多くみられる手法である。

**晩期の縄文式土器** (37~39, 41~51, 54~55) 39は深鉢形土器口縁部で、1-2層上~中出土。口縁下に横M字形押引刺突文を配し、口唇に刻目がつく。褐色で焼成は良く胎土は粗い。外面なで調整、内面ヘラ削り。黒土B I式。37は鉢形土器口縁部。内外ともなで調整で、くびれ部にヘラ磨きがある。黒褐色。胎土は精良で焼きもよい。黒土B I式か。1-2層上~中出土。41・42・43・44は刻目貼付凸帯文土器口縁部。いずれも深鉢形。41・44は口唇部に刻目がつく。41は1-2層出土、灰黄褐色で焼きは甘い。砂粒を含む粗い胎土である。42は1-2層出土。黒褐色、焼成は良く中小の砂粒を含む。43は3-2層出土。黒褐色。砂粒を含むが精良な胎土で焼成良。44は6-2層出土。外面黄褐色、内面黒褐色で中小の砂粒を含む胎土。焼きは良い。いずれも内外ともなで調整である。これらは黒土B II式。38・54・55は精製鉢形土器の口縁部である。38は表採品。暗褐色できめ細かい胎土、焼成は堅く内外ともヘラ磨き。54は同じく表採品で波状口縁をなす。内外面ともヘラで磨かれ特に外面は光沢を有する。黒褐色、大粒の砂粒を含むが胎土は精良、焼きも堅い。波頭数は不明であるが、波頭部にはヘラ押圧痕がある。頸部復元径19.2cm。55は暗褐色、焼きの堅いもので精良な胎土をもつ。内外ともヘラ磨き。口縁部に扁平な板状凸起がつく。一種の波状口縁か。その数は不明。1-2層出土。これら精製品は伴出の凸帯文土器からすると黒土B II式であろうか。45は褐色の粗い胎土で中くらいの砂粒を多く含む。内面なで、外面ヘラ削りで、口唇に刻目がつく。1-1層中~下出土。晩期粗製深鉢形土器。

47はなで調整の上にヘラによる斜格子沈線文を配する深鉢形土器胴部。内面は条痕の上をなでる。黄灰褐色。胎土粗く焼きも甘い。11-2層出土。時期・型式など不明であるが、後期の土器に伴うものかもしれない。46・48・49・50・51はいずれも凹み底の土器片である。48~50は深鉢形土器で46は外面黄褐色、内面黒褐色、中小の砂粒を含み内外とも条痕調整。復元径2.6cm。1-2層上出土。48は淡灰褐色、焼きは甘く粗い胎土には中小の砂粒が多い。内外とも擦痕を残す。復元径9cm。50は黄灰褐色、胎土に中小の砂粒・金雲母を含む。焼きは甘く内面なで、外面に擦痕がみられる。復元径7cm。48・50は1-2層下出土。46~50は後期の土器に伴うであろう。49は表採品で暗褐色を呈し、細かな砂粒を胎土に含み焼きは堅い。外底面に擦痕、立ち上がり部がなで、そこから上がヘラ削りで、内面は平滑になでられる。器形などからみて晩期の浅鉢形(皿形)土器の底部かもしれない。51は底の中央部が剥落しているかもしれない。外面赤褐色、内面黄褐色、砂粒を多く含み、焼きは甘い。内外ともヘラ削り。調整手法などから晩期の粗製土器底部か。1-2上出土。復元径は49が3.8cm, 51が4.4cm。(小池)

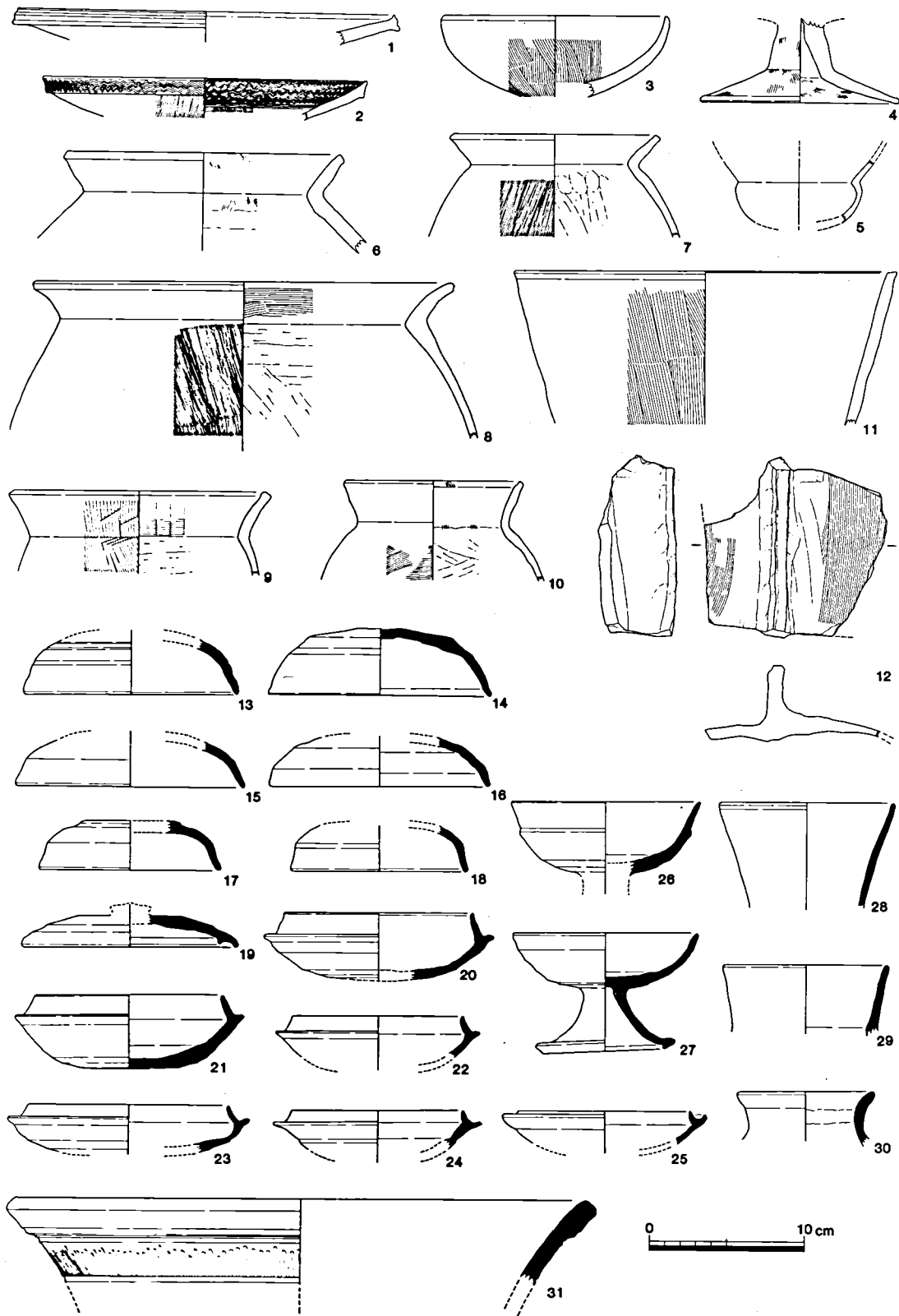
## 2) 弥生・古墳時代の土器 (第7図)

**弥生式土器**(1) 量的には少ない。1は器台の口縁と考えられるもので、口縁端面に2条の凹線文を施している。この他、図示できなかったが、櫛描文の壺、叩き目をもつ甕の破片等が検出された。

### 古墳時代の土器 (2~3 1)

**土師器** (2~12) 壺・甕・高杯・小型丸底壺・甗・甗などが出土している。甕が最も多く、他の器種はごく少ない。壺(2)は、口縁端面及び内面に櫛描波状文を有し、文様帯以下には細かいハケメ調整が施される。高杯は、有稜の杯部をもつと思われる脚部(4)と、それより時期の下る椀形の杯部のもの(3)が出土している。いずれもハケメが施されるが、前者ではさらに粗いナデ調整が行われている。小型丸底壺(5)は、ヘラ磨きはないものの、体部に比して口縁部が大きく外方に開く古式なものである。甕(6~10)は、外面の頸部以下と口縁部内面にハケメを残し、内面の頸部以下に





第7図 弥生式土器および古墳時代の土師器，須恵器

ヘラ削りを施すものがほとんどで、器壁は一般に薄い。ハケメは外面が斜方向、内面は横方向となる。9は口縁端を内側に若干肥厚させており、胴部の張りは少ない。古墳時代でも早い時期に位置づけられよう。6は内面にヘラ削りがみられず、ナデ上げただけのやや分厚い器壁を有する。7のように、内面の頸部付近に指頭圧痕を残す例もある。甗(11)は、上半部の破片が出土している。外面は粗いハケメ調整、内面は斜方向のナデ、口縁付近の内外面には横ナデが施される。甗(12)は、向かって右下の、開口部に接する部分の小片である。底およびその周辺は指頭圧とナデによって調整され、その両側には縦方向の粗いハケメがみられる。その他、図示できなかったが、鼓形器台の破片も出土している。

須恵器(13~31) 蓋杯・高杯・壺・甗が出土しているが、個体数としては、蓋杯の占める割合が大きい。杯蓋(13~19)は、かえりをもたない古い段階のものから、かえりのある新しい段階のものまで、各時期にわたって存在する。前者では、一般に口径の大きなものから小さなものへと縮小傾向が認められ、同時に調整も粗雑化している。13~16は、成形ののち頂部を回転ヘラ削りしたと考えられるが、17~19は回転ヘラ切り痕を残し、その後の調整は行っていない。内面はともに、天井部付近に一部縦方向のナデを施すほかは、全面にロクロナデ痕がみられる。杯身(20~25)は、いずれもたちあがりをもつ形態で、時期が下るに従って杯蓋と同じく口径の縮小傾向、またたちあがりの内傾、矮小化が認められる。同時に調整も粗雑化し、ヘラ削りの範囲はしだいに狭められる。内面の調整は、杯蓋と同様である。25は、一応杯身として扱ったが、内面にかえりを有する杯蓋となる可能性もある。高杯(26~27)は、いずれも無蓋のもので、杯部に明瞭な段をもち比較的長い脚部がつくと思われる形態(26)と、段が消失し脚部も短くなるもの(27)とがある。前者が杯底部を回転ヘラ削りするのに対し、後者は回転ヘラ切り、無調整とみられる。ともに、ほぼ全面にロクロナデ痕を残す。壺(28~30)は、全形の把握できるものではなく、出土量も少ない。28は、瓶類の口縁と考えられ、内外面全体をロクロナデする。29は、比較的短い直立気味の口縁をもつ壺でやはり全面にロクロナデを施している。30は小型の壺で、ロクロナデの他、内面の頸部付近に一部ナデ上げ痕を残す。甗(31)は、図示した口縁の他に、内面に同心円状の当て具痕をもつ胴部の破片が出土しているが、量的にはさほど多くない。口縁は、肥厚したにぶい感じのもので、内外面にロクロナデを行う。外面の口縁下部には、2条の沈線がめぐり、その下には、ヘラ状工具による縦の沈線文、さらに横の沈線と上から順に文様が施されている。

以上のように、出土量に偏りはあるものの弥生時代中期から7世紀まで、長期間にわたる遺物が検出された。中心となる時期は、4世紀および6世紀であり、特に土師器では布留式の段階、須恵器では『陶邑』編年の第II型式の段階に遺物が集中する。器種としては日常雑器類が多く、漁撈や製塩などの生産活動に従事していた人々の残したものと考えられる。(小沢・入倉)

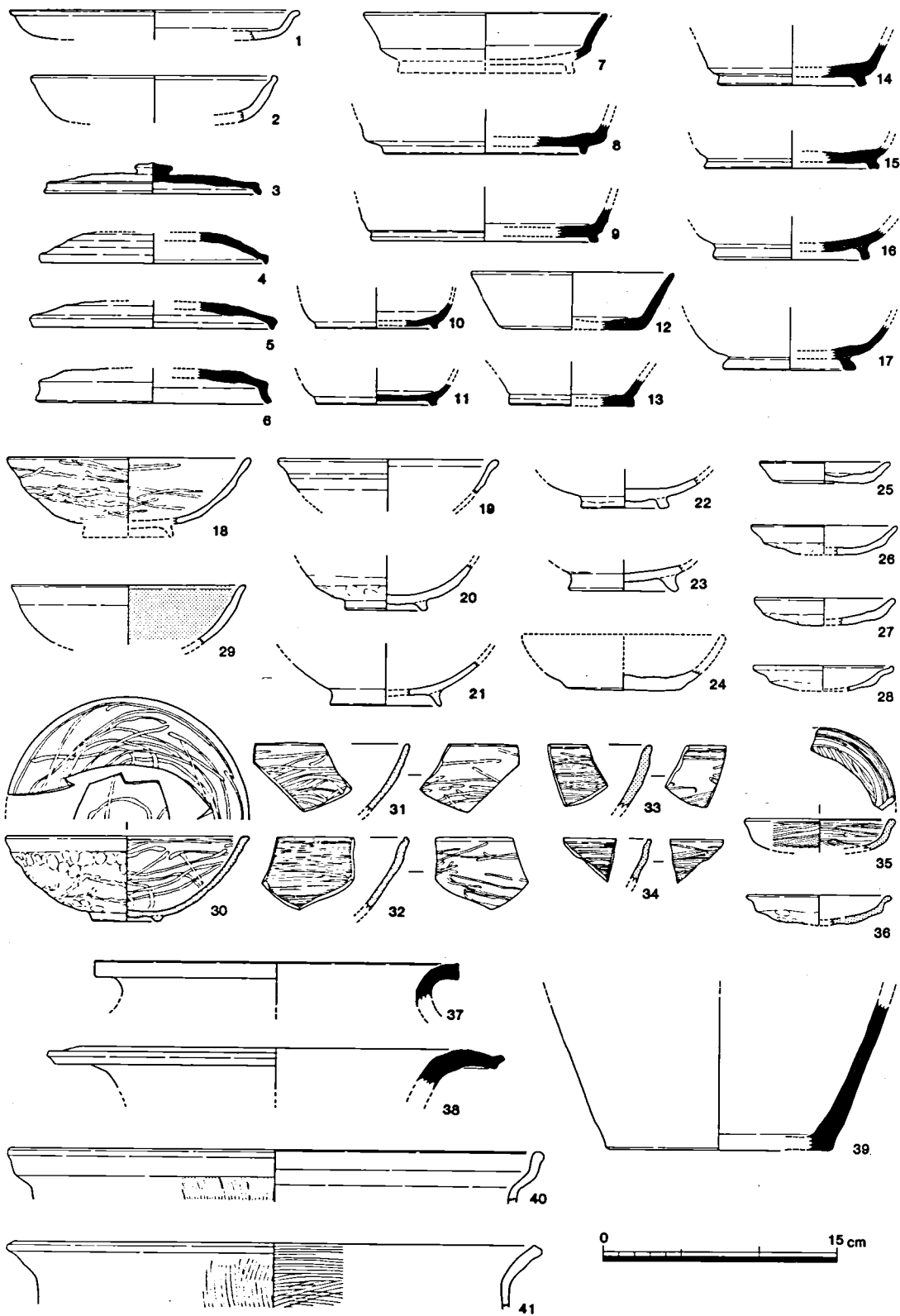
### 3) 歴史時代の土器(第8図)

ここでは歴史時代の土器のうち、三彩・緑釉陶器以外のものについて述べる。この時期の土器類は、奈良時代から平安時代前半にかけての時期と、平安時代後半から鎌倉時代前半にかけての時期の二つに分けて考えることができる。

#### a. 奈良時代~平安時代前半の土器(1~17)

土師器(1・2) 土師器はいずれも小片であるが、杯・皿類が中心で、ヘラ磨きを施し、赤色顔料を塗布したものが多い。1は皿で、内外面をヘラ磨きした後赤色顔料が塗られている。2は口縁部内面を沈線状にくぼませ、端部を丸く仕上げた杯で、外面にのみヘラ磨きと赤色顔料が施されている。

須恵器(3~17) 須恵器には杯が多い。3~6は杯蓋で、3~5のように端部を小さく折り曲げたものと、6のように大きく下方へ折り曲げたものがある。7~11、14~16は高台を有する杯身で、7は底部と体部との境に稜を有する特徴的なものである。8・9・14・15・16などは厚手で、比較的しっかりした高台をもつが、10・11は小型で器壁も薄く、高台も小さなものが付けられており、時期



第8図 奈良時代，平安時代，鎌倉時代の土器

は降るものと思われる。12は無高台の杯。13はいわゆるベタ高台の杯で、底面にはヘラ切り痕が残り、平安時代中頃にまで降るものである。17は外方に張り出すしっかりした高台をもつもので、瓶類の破片かと思われる。なお、図示はしないが、正倉院蔵壺と類似の壺の肩部分があり、陶邑産のものである。

#### b. 平安時代後半～鎌倉時代前半の土器 (18～41)

**土師器 (18～28, 40・41)** 18～23は土師器碗であるが、内外面にヘラ磨きを施したもの(18)と、体部外面上半にヨコナデを施し、内面に不定方向のナデを施したもの(19～23)とがある。前者は胎土が精良で、焼成も非常に良く、調整も丁寧であることから後者に先行する時期のものと考えられる。後者は草戸千軒町遺跡のⅠ期の碗に類似するが、それらよりも高台径が全般的に大きく(5.5～7.5cm程度)、草戸Ⅰ期よりも若干古いものであろう。杯(24)は底部の破片しか存在しないが、いずれもヘラ切り痕と板目状圧痕を留めている。25の皿も、杯と同様にヘラ切り痕を留めている。26～28も皿であるが、これらは中部瀬戸内地域で類例のないものである。26・27は口縁部のみヨコナデを施し、体部外面に指頭痕を留めており、特に27は瓦器の皿に形態が酷似している。28は「て」字状口縁と呼ばれる独特の形態を呈する皿で、畿内で多く出土しているものである。土師器としては、その他に鍋(40・41)、甕の破片が出土している。

**黒色土器 (29)** 内面のみを黒化させた碗が2点ほど出土している。

**瓦器 (30～36)** 瓦器は、和泉型・楠葉型と呼ばれているものに該当する資料が出土している。30・31は和泉型の碗で、内外面ともヘラ磨きが施されているが、30の外面の磨きは雑である。32～34は楠葉型の碗の破片で、内外面に磨きが施され、口縁内面には一条の沈線がめぐっている。33はその沈線が浅く、34はやや薄手で、沈線は段のようになっている。35は楠葉型の皿で、内外面とも磨きが密に施されている。36は和泉型の皿であるが、磨きは不明瞭である。

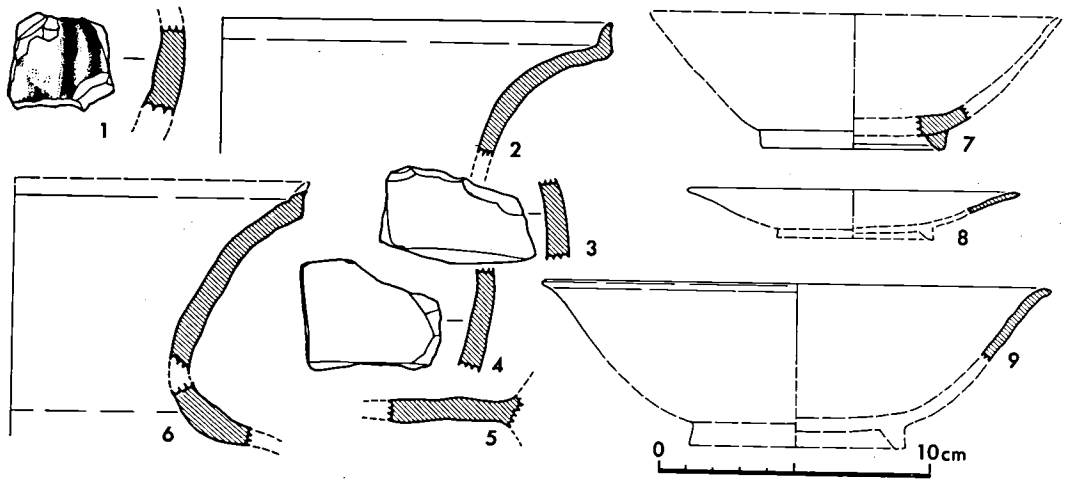
**陶器 (37～39)** 陶器としては、壺類の破片が多く出土している。37の破片は灰褐色を帯びたやや瓦質に近いもので、外面に刻線叩きを施し、内面をナデ調整した胴部が付く。38は常滑焼の広口壺になるとと思われるもので、外面には暗緑色の釉がかかっている。常滑焼の破片は、他にも数点出土している。39は壺の底部で、内外面ともヨコナデが施されており、焼成は堅緻で暗灰色を呈する。

**磁器** 白磁碗の破片が1点出土している。玉縁口縁の付くものかと思われる。

以上のように、歴史時代の土器としては奈良時代から鎌倉時代前半にかけてのものが出土しているが、各時期の資料が同じように出土しているわけではなく、特定の時期に遺物が集中する傾向が認められる。奈良時代から平安時代前半のものとして挙げた土器の中では、大部分の土器が8世紀代に属すと考えられるものであり、10・11・12など9・10世紀にまで降るものは少ない。一方、平安時代後半から鎌倉時代前半にかけての土器では、19～23のような土師器碗が最も多く出土している。これらは先に述べたように草戸Ⅰ期よりは古い様相を示しており、12世紀後半から13世紀初頭の時期が考えられる。また瓦器碗も30・31のような12世紀代に属するものや13世紀前半のものが中心となっており、12世紀後半を中心とする時期に一つのピークがある。その他、土師器皿28、瓦器碗32・33などは11世紀代にまで遡るものであろう。また、14世紀以降の遺物としては近世以降の陶磁器片がわずかに出土しているのみで、大部分の遺物は13世紀代までに収まっている。以上のような事から、この遺跡は断続的ではあるにせよ13世紀までは存続していたが、それ以後廃絶するに至ったものと考えられる。(鈴木)

#### 4) 施釉陶器 (第9図)

すべて1区の中央部付近、およびその南北側の1N区、第10区から出土したもので、表層の砂層(3cm)の下、第1層の上面に須惠器・土師器と共に散在していたものであり、明瞭な遺構に伴うものではない。



第9図 施釉陶器

三彩陶器(1) 4片出土したが、いずれも同一個体と考えられるもので、ここでは最大の破片を図示しておく。表面は濃綠色釉に火だすき状に暗褐色釉がかかり、その境では黄綠色となっている。内面は水挽き痕が一部みとめられるが、黄色釉でおおわれている。器壁の厚さ1cm前後と分厚く、胴部復元径14.2cmの薬壺の一部であろう。8世紀後半の奈良三彩である。

緑釉陶器(2~9) 3~6は口径29cmの長頸瓶子の口縁部と胴部、底部の破片で、いずれも同一個体と考えられるもので、この破片が15点出土した。胎土は黒色、緻密であるが、焼成はやや甘い。表面はヘラで縦方向にナデ調整後、淡綠色の施釉をし、内面は水引き痕の上に同色の施釉である。塩水のため、釉の剥落や、釉の銀化した部分も多く、斑点状になっている。口縁から底部にいたるまで内外面全面に施釉した、奈良時代末~平安初期(8C~9C初)のものであろう。6も長頸瓶の口縁~肩部にかけての破片で合わせて7点出土した。2に比べて外反がゆるやかで、口縁端部のひき伸しが斜めである。復元口径21cm前後で、内外面とも濃綠色釉であるが、内面の施釉は肩部までである。胎土は白色・精良で、平安時代初期(9C初)のものであろう。

7は高台付碗の底部で、胎土は白色・精良で、内面暗綠色、外面淡綠色釉で、高台端の内側を斜にカットしているのが特徴である。平安時代でも10世紀代のものかと思われる。8は口径12cm前後の小皿の口縁部で、胎土は黒く、焼成堅緻で須恵質である。内外とも黒綠色の施釉で尾張尾北窯産の10世紀代のものであろうか。9も復元口径18cm前後の碗の口縁部で、胎土は灰色、焼成堅緻な須恵質で外面のみ黒綠色の施釉がある。京都小塩窯産であろうか。これも10世紀代のものであろう。また、図示しなかったが器壁がうすく(3mm前後)、内外面に淡い緑釉をかけた平安時代の破片1も出土している。

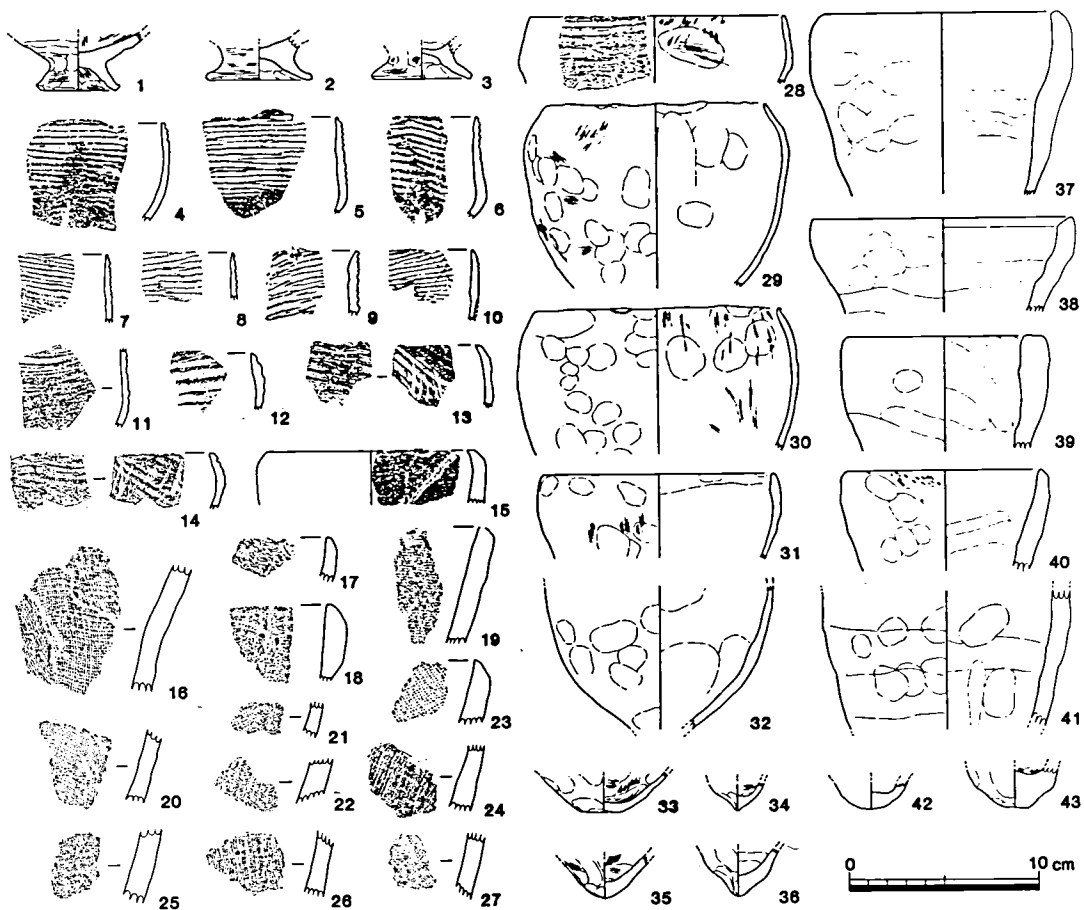
灰釉陶器 図示しなかったが、2点が出土している。いずれも同一個体の長頸瓶子の胴・肩部の破片で須恵質、外面に暗綠色の施釉をする。尾張猿投窯産の9世紀代のものである。(川越)

### 5) 製塩土器(第10図)

製塩土器には倒杯形脚台をもつ型式、小型丸底で外面に横方向の叩きを施す型式、薄手丸底で、口縁のみに横方向の叩きを施す型式、薄手尖底の型式、厚手丸底の型式の5型式がある。

第9図1~3が倒杯形脚台をもつ土器で、底径はそれぞれ3.9・5.3・5.0cmである。暗黄褐色を呈し、1mm程度の砂粒を多く含む。脚台は指頭押圧による成形である。脚台は大きく、しかも外踏んばりが強い。4~5世紀の古墳時代前期に属する。出土量は少ない。

4~11は小型丸底で、外面に横方向の叩きを施す型式の土器である。黄褐色ないし灰褐色を呈し、胎



第10図 製塩土器 (15~27は土器内面の布痕拓影)

土はきめ細かい。外面が灰褐色を呈する例が多いのは、二次的な火熱を受けた結果とも考えられる。外面には、直立かやや内傾する口縁部から4~5cm下位まで横方向の叩きを施す。器壁は叩き痕のなくなるあたりで屈曲して、丸底を形づくる。復元すれば、口径7~8cm、高さ7~8cmの湯呑茶碗に似た形態となる。第5トレンチに集中して出土したが、量は少ない。6世紀前半~中葉までの古墳時代後期に位置づけられる。

12~14, 28・33は薄手丸底で、口縁のみに横方向の叩きを施す型式の土器である。12・28のように口縁外面だけに横方向の叩きを施すものと、13・14のように口縁外面に横方向の叩き、内面に斜方向の叩きを施すものがある。いずれも暗褐色系統の色調で、器壁は薄い。口縁はやや内傾して、口縁直下で最大胴径をもつ。28は口径13.0cmに復元できる。33はこの型式の土器の底部で、丸底を形づくっている。6世紀後半頃の古墳時代後期に位置づけられるが、この時期に普遍的にみられる、直立ないしはやや内傾する口縁の外面のみに横方向の叩きを施し、肩部で強く外に張り出し、丸底となる典型的な土器は確認できなかった。出土量は少ない。

29~32・34~36は薄手尖底の型式の土器である。29~31は、口径がそれぞれ11.4・12.8・12.0cmとなる。いずれも暗褐色系統の色調を呈するが、特に外面は灰褐色を呈する部分が多く、二次的な火熱を受けたとみられる。口縁部はいずれも内傾して、口縁直下で最大胴径をもつ。内・外面とも顕著に指頭による押圧痕が残る。この上部をさらに細かなハケで調整している。34~36はこの型式土器の底部で、尖底を形づくっている。7~8世紀頃の古墳時代末期から奈良時代前期に位置づけられる。調査

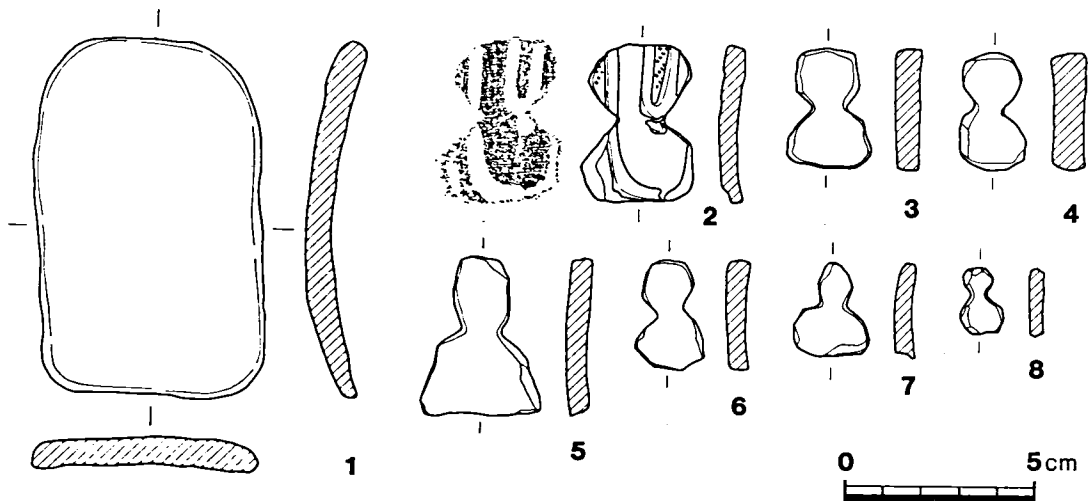
域全体にわたって多く出土している。

15~27・37~43は厚手丸底の型式の土器である。37~40は口径がそれぞれ11.9・13.5・10.2・10.2 cmに復元できる。高さは30 cm前後に復元できよう。いずれも外面は褐色から灰褐色を呈し、内面は黄褐色ないしは赤黄褐色である。外面に灰褐色系統が多いのは、二次的火熱を受けたことが考えられる。瓦質になった例もみうけられる。形態的には、口縁直下で外ぶくらみとなり、最大胴径をもつ。口縁下4~5 cmで、しぼられて器壁はほぼ直立気味となり、底部へと向かう。器壁は厚く、1 cm前後もある。39では1.6 cmの厚さである。底部に向かうにつれ、若干薄くなる。内・外面とも指頭による押圧痕が顕著である。内面の口縁部周辺はヘラ削り成形痕がみられる。40は口縁外面に斜方向の叩きが施されている珍しい例である。42~43はこの型式の土器の底部で、 $\varnothing$ 底に近い丸底である。8~9世紀頃の奈良時代後半から平安時代にかけて位置づけられよう。調査域全域から多く出土している。

この厚手丸底型式の土器には布痕をもつ土器が含まれている。15~27がそうで、色調は黄褐色から灰褐色、暗褐色を呈するものがあり、外面が灰褐色系統の色調となる例が多いのは二次的火熱を受けた結果によるのであろう。外面は指頭による押圧痕をもち、また口縁端部は斜めに切り落とされた形態を示すものが多い。布痕をもたない同型式の土器の口縁端部に、平坦もしくは丸味を帯びる例が多いことに注目すれば、これは布張りを施した型台を用いて成形され、最後の余分の粘土をヘラで切り取った状態を示しているのであろう。

布目には緯糸、経糸が、17・25のように、1 cm<sup>2</sup>あたり、それぞれ20本以上もある非常に細かな織り、15・18・19・24のように、(17~18)×(12~13)本の細かな織り、20・21・26・27のように、(13~14)×(11~12)本の粗い織り、さらに16・23のように、9×8本の非常に粗い織りがある。このように、さまざまな織りの布がみられることと、15・16・18のように布の縫い合わせ部分がみられることから、端切れを入手して、型台にかぶせて、型による土器成形がなされたことがわかる。(古瀬)

6) 土製品 (第11図) 1は板状土製品で第1トレンチ第2層より出土した。隅丸方形の板状を呈しており若干湾曲している。長さ9.5 cm・幅6.2 cm・厚さ0.7 cm。無文で両面とも磨滅が著しいが、内面はヘラ削りに似た手法がうかがえる。時期は出土層位より縄文時代後期と考えられるが、類似例と思われる破片が第3トレンチ第1層より出土している。また岡山県里木貝塚からも有文及び無文の類似例が報告されているが、いずれも破片で全容は明らかではない。土版の一種であろうか。2~8は第11トレンチ第2層より一括して出土した。縄文式土器片を加工したもので側面を磨いて仕上げている。中央がくびれ、一方が大きい、特徴的な形状を呈しており、長さ1.8~4.2 cm・幅1.2~3.2 cm・



第11図 土製品実測図

厚さ0.4~0.8cmである。2にみられる文様は磨消縄文で沈線内には赤色顔料が認められる。利用した土器片は縄文時代後期後半の福田K II式であろう。これらも類例に乏しい。いずれも10g未満であり錘には不適當であり、円板形土製品あるいは土偶などの人形と関連するものであろうか。(藤井)

土錘(第12図3~13)

棒状土錘(3~6) 第1・3・4・5北半・10トレンチの第1層より合計59点出土した。数量的には他に比べて圧倒的に多いが、大半は折損している。完形品で長さ8.5cmから5cmと長さに若干の幅があるものの、重量はいずれも10gから40gまでの間に収まる。5のように両端が著しく磨滅している例もある。

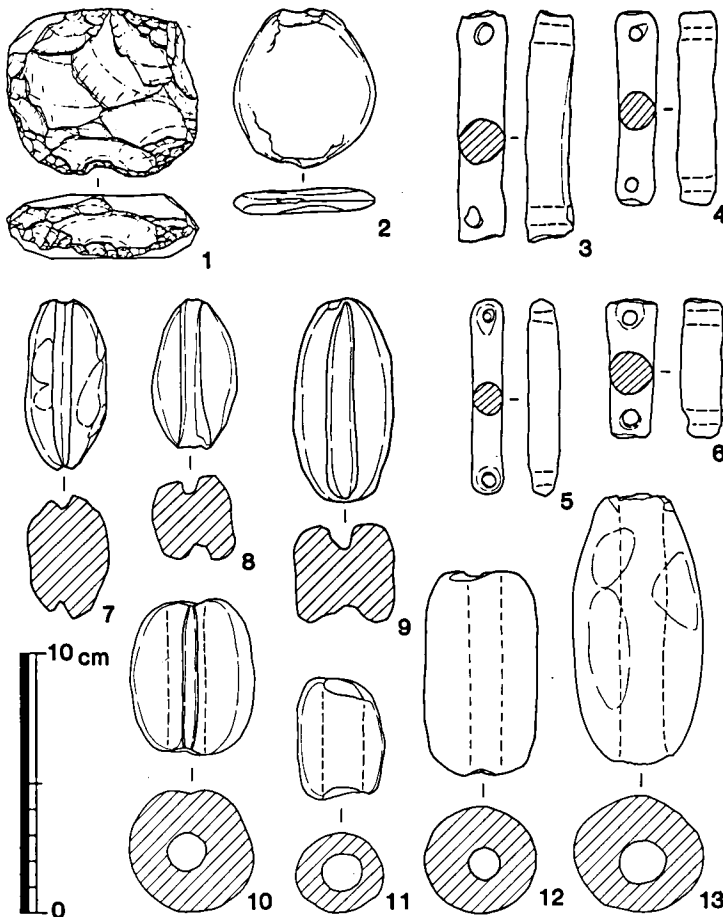
有溝土錘(7~9) 各トレンチの第1層より4点出土した。このうち第1・5トレンチ第1層より出土したのを図示する。重量が100g前後のもの(7・9)と50g前後のもの(8)に分かれるが、表採品で19gと小型の例もある。7は指頭痕が顕著である。

有溝管状土錘(10) 第5トレンチ北半第1層より出土した唯一の例である。溝は浅く貫通孔と同方向である。139g。

管状土錘(11~13) 第1・3・4トレンチ第1層及び第5トレンチ北半第2層より15点出土した。重量では最大219g、最小16.5gと最も幅が広い。

これらの土錘は出土層位より古墳時代以降と考えられるが、多くは奈良・平安時代のものであろう。(藤井)

7) 石器(第13図, 第12図1・2)

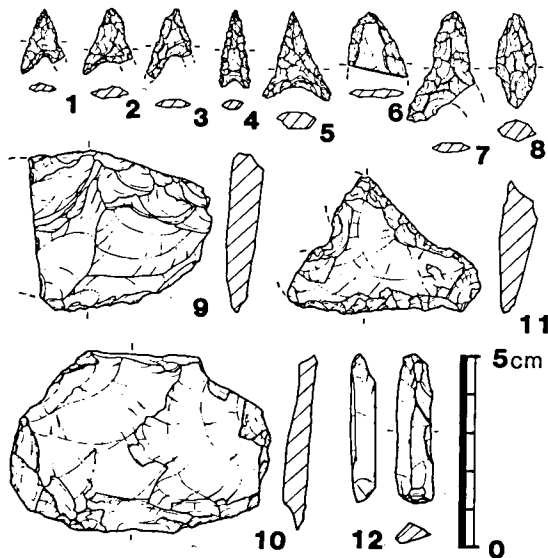


第12図 石核, 石錘, 土錘実測図

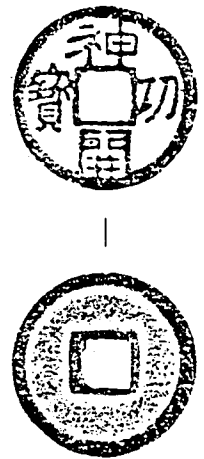
石錘(第13図1~8) すべて安山岩(サヌカイト)製で第1トレンチ第1層(4), 第2層(1・2・5・7), 第3トレンチ第2層(6・8), 及び第11トレンチ第2層(3)より出土した。凹基無茎式と凸基無茎式があり前者が大半を占める。長さ・重量より, 長さ2cm前後・重量0.3g前後のもの(1~4), 長さ2cm前後・重量1g前後のもの(5・8), 長さ3cm前後・重量1g前後のもの(7)とに分類できる。また調整方法では全面剝離のもの(2・4・5・7・8), 片面周辺調整のもの(3), 両面周辺調整のもの(1・6)がある。

スクレイパー(第13図9・10) 2点出土し, とともに安山岩製で第1トレンチ第2層より出土した。10は長さ4.7cm・幅6.8cm・厚さ0.85cm・重量28.5gである。いずれも片面に主剝離面を大きく残す





第13図 石器実測図



第14図 「神功開寶」 銭拓影 (実大)

が、外湾気味の刃部は両面から比較的念入りな調整加工が施されている。

**石匙**(第13図11) 安山岩製で第1トレンチ第2層より出土した。つまみと刃部を一部折損するが、現存長3.6cm、現存幅5.1cm・厚さ0.8cm、現存重量12.2gである。両面とも主剝離面を大きく残すが、直線的な刃部は両面から丁寧な調整加工が施されている。

**楔形石器**(第13図12) 安山岩製で第1トレンチ北拡張区第1層より出土した。長さ3.9cm・幅0.9cm・厚さ0.55cm・重量2.5gである。縦長剝片を素材としており裏面には主剝離面を残している。左側面には截断面が、下端部には細かな剝離痕がみられる。

**石核**(第12図1) 安山岩製で第5トレンチ表層より出土。板状の大型剝片を素材とし、主に表面の上下より剝片を剝離している。なお表面下端から右辺にかけて二次調整加工及び潰れ痕があり、スクレイパーもしくは楔・敲石のような用途に転用されたようである。

**石錘**(第12図2) 円磔打ち欠き石錘で緑泥岩製。第1トレンチ第2層より出土した。扁平円磔の長軸側の両端を両面から数回打ち欠いている。長さ6cm・幅5.5cm・厚さ0.9cm・重量45.2gである。

これらの石器類は出土層位からみて縄文時代と考えられるが、石核については明確にし得ない。他に剝片が比較的多く出土しており、その中には使用痕の認められるものもある。(藤井)

#### 8) 銅銭 (第14図)

「神功開寶」銭1枚が、第1トレンチ西端部第1層上面より出土した。直径2.51cm・重さ3.20g。皇朝十二銭の一で、何種かある神功開寶銭のうちの、功の字が刃となり、しかも刀が長目のいわゆる長刀潤縁銭である。称徳天皇の天平神護元年(765 A.D.)に鑄造されたものである。(川越)

### 4. 調査の成果

宇治島北の浜遺跡は短期間ではあるが第1次発掘調査によってそのおおまかな状況をつかむことができ、予想以上の成果をおさめたが、新たに提起された問題も少なくない。

**遺跡の範囲・文化層** 遺跡は三日月形の浜堤上にあるが、浜堤背後の低湿地の存在や、浜堤の形状からみて、かつて奥深く湾入していた地形であったものが、東側の急斜面の部分のマサ土の崩落を契機に、潮流と季節風によって砂州を形成して湾を封鎖したものであり、浜堤の包含層の最下面の土器からして縄文時代中期前半以前には浜堤が形成されていたと考えられる。こうした浜堤の形成によっ

てようやく漁業基地としての機能をもつようになり、縄文人が利用をはじめたものであろう。縄文時代の包含層は浜堤のほぼ全域（南北 35 m、東西 90 m）にわたっており、3000 m<sup>2</sup>に及ぶものと考えられる。今回の調査では縄文前期にさかのぼる資料はなく、中期の資料がごくわずかに出土したにすぎなかったし、高松市の瀬戸内海歴史民俗資料館の宇治島出土と伝えられる完形の彦崎Ⅱ式の土器も他の島（沙弥島）との混同ではないかとの疑いもあるところからすると、北の浜遺跡は今回の資料でみる限り縄文中期以降ということになるが、果たして確実にこれより古い遺物や包含層が存在しないのか次年度以降あらためて、島内を含めて精査する必要がある。包含層下部の縄文式土器（中期鉛元式、後期前半中津式）の出土する位置は、現海面（満潮時）より-40~-60 cmにあるのは確実であり、縄文中期～後期前半にかけてはこの近海では海面がすくなくとも1 m以上は低かったとみるべきであろう。瀬戸内海では海面下のレベルに遺物包含層の存在する例が、早期以降断片的ではあるが存在することを考えると、いわゆる「縄文海進」を含めて、内海の海面変化についての再検討がのぞまれる。

**縄文式土器と生業** 縄文式土器は後期・晩期のものが中心であり、各時期、各型式のものが多数出土し、瀬戸内海の東西南北地域の文化の交流点の状況をしめすと同時に、断続的ながら宇治島が長期間利用されていたことをしめすものの、その生業をしめすものは意外と少ない。石錘が1点のほかは石匙と、スクレイパーであり、これらは魚の解体、うろこ剥ぎなどに用いられたと考えても、釣針、銛、ヤスなどの漁具が酸性土壌とはいえ、まったくみられないのも、また貝類・魚骨がきわめて少ないのもこの浜が漁の中継基地・前進基地であったために獲物は本拠地に持ち帰った結果であろうが、廃棄物捨場としての貝塚・貝層の形成がいまのところ認められないこともこの浜が日常生活を営む根拠地ではなかったことをしめしている。石鏃や鹿角も出土しているところからシカ猟が連想されるが宇治島はシカの棲息する環境ではなく、骨角器の材料として持ちこまれたものであり、石鏃は海鳥・小型の哺乳類がその対象であったものであろうか。

**弥生式土器** 弥生時代の遺物はきわめて少なく昨年採集遺物を含めて考えてみると、弥生前期～後期の土器がしめすように細々ながらも前代同様島が利用されたことをしめすにすぎない。

**土師器・須恵器** 古墳時代4世紀に入ると宇治島は漁撈活動以外に土器製塩の地として利用され始める。これは弥生時代後半に備讃瀬戸にはじまった土器製塩が、西方に拡大した時期にあたっており、これ以降13世紀までが宇治島が歴史的な意義をになった時期にあっている。出土する土師器・須恵器はこれら製塩・漁撈活動に従事した人々の残したものであろうが、これからみると、土師器では布留式の段階（4世紀～5世紀）、須恵器では陶邑編年の第Ⅱ型式の段階（6世紀前半）、奈良時代後半（8世紀後半）、平安末～鎌倉初期（12世紀～13世紀）の土師器が量的に多く、これらの時期に生産活動がそれぞれピークに達していたことが窺われる。一方古墳時代～平安時代の製塩土器もほぼこれに対応した形で各型式に出土量の差があらわれている。宇治島では奈良時代後半～平安時代前半にかけて最後の製塩活動は終わっている。これは小島の故に燃料としての薪の供給が続かなくなると、新たにアカマツ林、雑木林が成長するまで一時中断した状況が何回かくり返され、最終的には薪材の涸渇と、新たに展開した塩浜製塩と煎熬過程の革新（塩釜の採用等）によって、宇治島のもっていた意義の一端が失われたことによるものであろう。一方その後宇治島では平安時代の土師器を出土していて、なかには畿内地域から搬入されたものも認められ、施釉陶器などと同様な祭祀に関連した人々のもたらしたもののか、不明ではあるが、再び漁撈活動や内海航路の活発化にともなう交流の結果とみるべきであろう。

#### 製塩土器

製塩土器は古墳時代前期から奈良時代後半～平安時代に至る各時期に属するものが出土している。しかし、各時期に属する諸型式の土器が時期的に連続して出土することは少なく、また連続している場合でも大規模な連続操業を示すような遺物の出土状況はみられない。まず、4世紀代から5世紀初頭にかけて、倒杯形脚台をもつ土器で製塩が開始されたが、小規模であった。5世紀代を通じて操業は確認できず、次に生産が開始されるのは6世紀になってからのようである。6世紀前半に湯呑形

をした小型丸底土器で製塩がなされたが、土器の出土量からみれば、小規模操業とみられる。6世紀後半にも引続いて、薄手丸底土器での製塩があったが、これも小規模である。土器を多量に用いて製塩が行われるのは7世紀から8世紀にかけての頃である。薄手尖底土器は遺跡地の調査区のほとんどで確認されており、出土量も多い。次いで、8世紀後半から9世紀にかけて、厚手丸底型式の土器による最後の土器製塩が行われる。この土器も調査区のほとんどで出土しており、かなりの規模で操業されていたことが窺える。

ただ、いずれの時期での製塩も複数の型式の土器で行われた事実は認められず、それぞれに示した時期の幅一杯を通しての操業でなく、短期間に集中して行われたとみられる。このことは土師器・須恵器などの他の出土遺物の年代観とも一致している。また、規模の大きい操業といっても廃棄土器が層をなすほどの出土量ではないので、大規模な製塩集団による操業は考えられない。これは宇治島が小島であることにも関係がある。さらに操業時期に50～100年間程度の間隔が認められるのは、製塩に伴って大量消費される燃料材の確保という問題が存在するからで、山林の回復にその程度の時間が必要であったことを示している。したがって、宇治島周辺に基盤をもつ製塩集団はかなり広範囲に島嶼山地の入会権を有していたのではないかとみられる。今後、福山<sup>2)</sup>湾、笠岡湾の周辺島嶼の関連調査が進展して比較検討できれば、製塩の時期的補完関係が把握できよう。なお、この遺跡の製塩集団は他の出土遺物との関連でみれば、半製塩半漁といった生産様式が想定できる。

また、最近、内陸部の遺跡で製塩土器の出土する例が増加しているが、この点についても若干の問題点を指摘しておきたい。

宇治島北の浜遺跡出土製塩土器で注目されるのは、小型丸底で外面に横方向の叩きを施す型式の土器と厚手丸底の型式の土器である。前者は、広島県ではこれまで出土例のあまり知られていない型式の土器である。広島県では主として島嶼部で各時期の製塩土器が確認されているが、5世紀後半～6世紀前半の製塩土器が明瞭でない。ところが、最近、県北部の庄原市・境ヶ谷遺跡群で6世紀前葉～中葉頃の集落に伴って、この型式の製塩土器が多量に出土した<sup>3)</sup>。このことから、この型式の土器は固型塩生産ならびに運搬容器として製作されたということも想定できるが、宇治島北の浜遺跡ではこの型式の土器に伴って、鹹水煎熬用土器として確実に分離できるものは判明していない。いつの時期から製塩作業工程のなかで、鹹水煎熬用と固型塩作成および運搬用として土器型式が分化していくのかは不明であるが、少なくとも現状ではこの型式の土器は鹹水煎熬、固型塩作成および運搬といった一連の作業工程を担うものとしてとらえておきたい。

後者の厚手丸底型式の土器の場合は、少し事情が異なってくる。この型式の土器は九州から大阪府、和歌山県あたりまで、瀬戸内海地方に広く分布しているが、最近、平城京域遺跡、太宰府遺跡など大消費地遺跡での出土が目立っている。広島県でも安芸国府あるいは駅家跡と考えられている、安芸郡府中町・下岡田遺跡で出土している。このことから、この型式の土器も固型塩作成ならびに運搬容器としての性格が考えられている。この型式の土器の場合は、大阪府田山遺跡、福岡県・海の中道遺跡<sup>6)</sup>で、この型式の土器に伴って容量の大きい甕形粗製土器が出土している。この甕形粗製土器は色調、器壁の剝落状態などから強い二次的の火熱を受けており、鹹水煎熬容器と考えられている。したがって、奈良時代後半～平安時代初めにかけては、製塩作業工程の中で鹹水煎熬過程と固型塩作成および運搬過程が土器の形式として分化しているのである。宇治島北の浜遺跡では厚手丸底型式の土器のみが出土しており、甕形粗製土器は確認されていない。このことが、単に調査区域の設定による結果で、未調査区域に鹹水煎熬用の遺構と遺物が存在することを示すのか、それともこの厚手丸底型式の土器ですべての作業工程を担っていたのかは、今回の調査では明らかにできなかった。今後、瀬戸内海沿岸および島嶼部全体を通じて明らかにしていかなければならない問題点である。また、布目をもつものともたないものとの関連についても、現状では明らかにしえなかった。この型式の土器の生産地および布目をもつものともたないものとの機能の差異など、今後に残された課題といえよう。

施釉陶器 施釉陶器は合計32点出土したが、個体数としては三彩1、緑釉5、灰釉1となって、遺

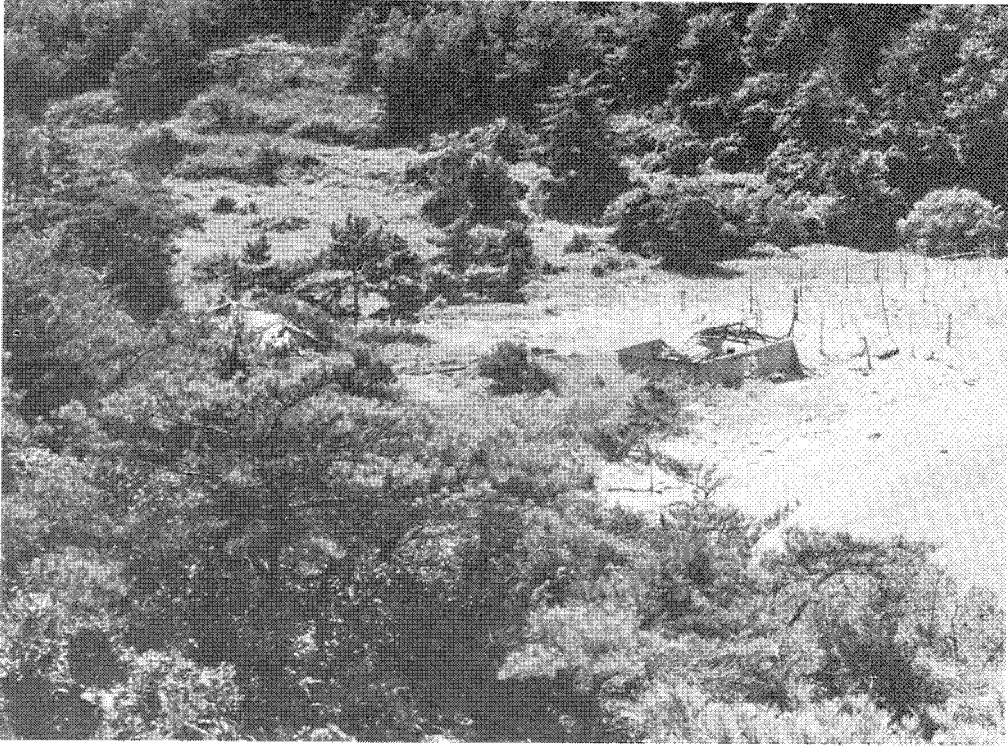
跡の規模、範囲を勘案すれば、今後の調査如何では相当な個体数となる蓋然性が高い。安芸・備後で施釉陶器出土遺跡は、安芸郡府中町城山北貝塚(緑釉, 椀, 平安), 同下岡田遺跡(緑釉, 椀, 奈良末), 東広島市西条町安芸国分寺跡(緑釉, 奈良?), 安芸郡蒲刈町沖浦遺跡(緑釉, 椀, 平安), 三次市和知町羅漢遺跡(緑釉, 皿, 平安), 同寺町廃寺(三彩および緑釉, 奈良), 同下本谷遺跡(緑釉椀, 皿, 奈良?), 同上山手廃寺(三彩, 椀, 中世), 福山市草戸町千軒町遺跡(緑釉, 椀, 平安), 同ザブ遺跡(緑釉, 椀, 灰釉, 平安), 同自彊高校遺跡(緑釉, 椀, 平安), 深安郡神辺町中谷廃寺(灰釉, 椀, 平安), 同備後国分寺跡(緑釉, 奈良)の13遺跡であるが、いずれも1, 2点で、多くは緑釉椀である。寺町廃寺, 上山手廃寺の唐三彩, 宋三彩片は仏具として使用されたものであろうが、宇治島の場合、これらとは性格を異にするものである。すなわち、ここでは奈良時代~平安時代にかけての少なくとも4時期の施釉陶器がもちこまれていることになり、宇治島の位置、遺跡の状況からしてこれらの施釉陶器は「神功開宝」銭ともども祭祀用具と考えるのが妥当であろう。このさい、正倉院蔵須恵器壺に類似の土器の存在などを考えあわせると、国が直接関与した祭祀の場であった可能性が強い。奈良時代後半頃から内海航路による水運が活発になり、租米の輸送、国司の赴任、外国使節の上京なども海路利用となっている。東は紀伊水道、西は豊後水道、関門海峡からの潮流が出合う燧灘~塩飽諸島のあたりが船泊りして潮を待つ場所になり、この近辺の島が利用されたことに違いないが、内海航路の安全を祈願する祭祀もまたこれらの地で同じくおこなわれたことは当然であり、内海航路が貢納物を運搬する手段として重要になればなるほど国の航路の安全とこれの祈願に対するかかわりあいが高くなり、祭祀自体も国の関与する色あいを強めていったものであろう。

今回の調査にあたっては、前記調査参加者をはじめ、福山市教育委員会柿原曠氏、同上田靖士氏、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所福井万千氏、走島町民宿浜上の皆さんにも多大のご協力をいただいた。また、本報告については、出土遺物について多くの方々のご教示を得たが、とくに施釉陶器については名古屋大学檜崎彰一教授、倉敷考古館々長間壁忠彦氏、広島大学河瀬正利氏のご教示を得た。記して感謝いたします。

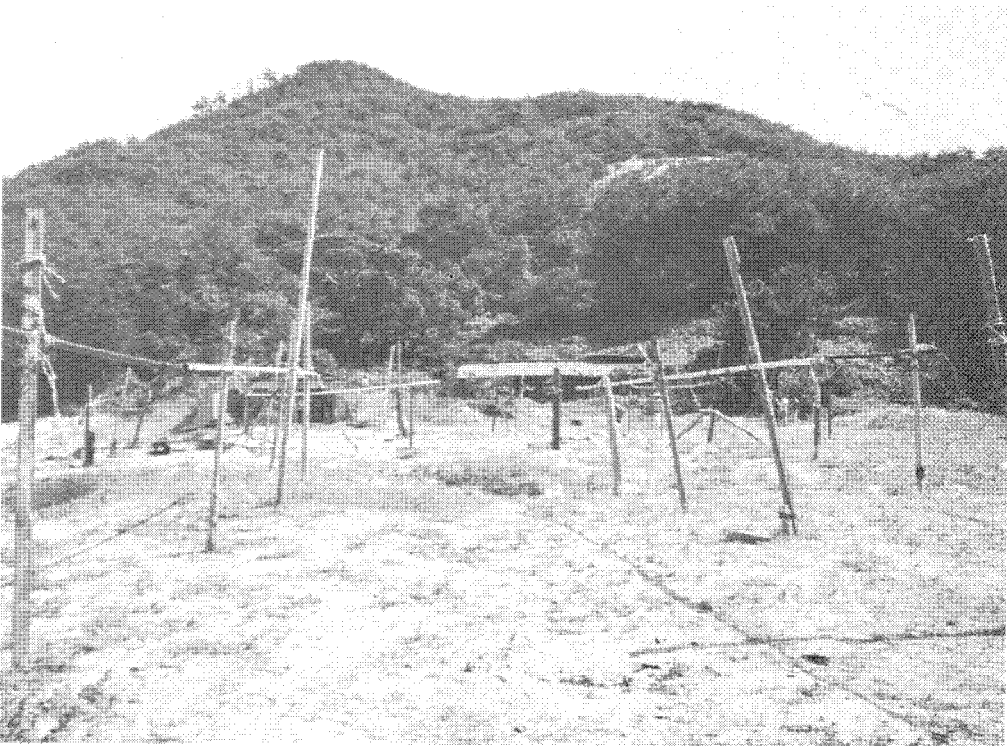
なお、出土遺物の整理は小池伸彦、藤井孝章、妹尾有規子が中心になってすすめ、遺物の実測、浄書には小池、藤井のほか、広大大学院生小池やよい、小沢毅、入倉徳裕、鈴木康之、村田亜紀夫、島立桂および川越があたった。写真図版の製作は川越が担当した。(川越・古瀬)

## 注

- 1) 川越哲志「福山市宇治島の考古資料(1)」『内海文化研究紀要』第11号、広島大学文学部内海文化研究室 1983。
- 2) 古瀬清秀・藤野次史「大崎上島諸島における製塩遺跡について」『内海文化研究紀要』第9号 広島大学文学部内海文化研究室 1981。この中で、広島県内の複数の製塩遺跡集中地域間で、土器製塩の時期的な盛衰に差異があつて、それぞれに生産量を補うために、地域内はもちろん、地域間においても塩生産に相互補完関係の認められることを指摘しておいた。
- 3) 松井和幸編『境ヶ谷遺跡群』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1983。出土製塩土器にはいくつかの型式が認められるが、数量的に一番多いのは小型丸底で、器表に平行叩きを施す型式の土器である。なお、6世紀後半によくみられる、薄手丸底で、口縁外面のみに平行叩きを施す型式の土器や鉢形で外面に格子目叩きを施す型式の土器もみうけられる。この遺跡では6世紀中葉までの須恵器が出土しているので、これらの型式の土器は6世紀中葉頃に初現する可能性が強い。
- 4) 注2参照。
- 5) 國乘和雄・小島成元ほか『田山遺跡』大阪文化財センター 1983。
- 6) 横山浩一・山崎純男ほか『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第78集 福岡市教育委員会 1982。



a 宇治島北の浜遺跡全景（北東方向より）



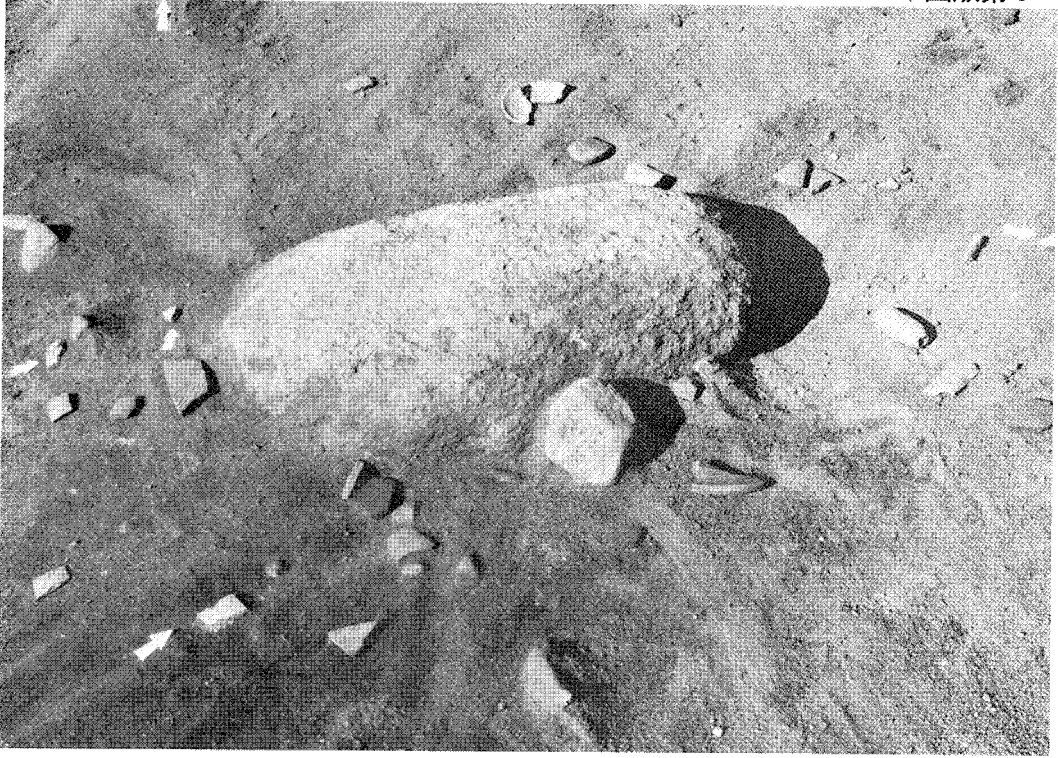
b 宇治島北の浜遺跡近景（西方向より）



a 第1トレンチ西端部南壁断面



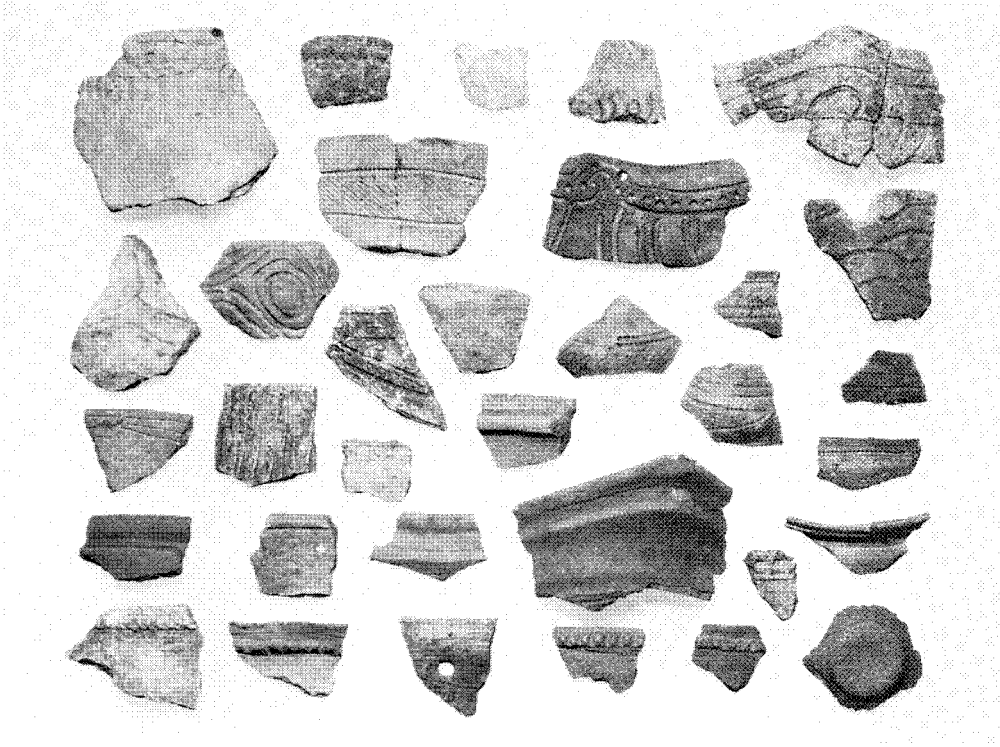
b 第5トレンチ石積遺構及び土器出土状態



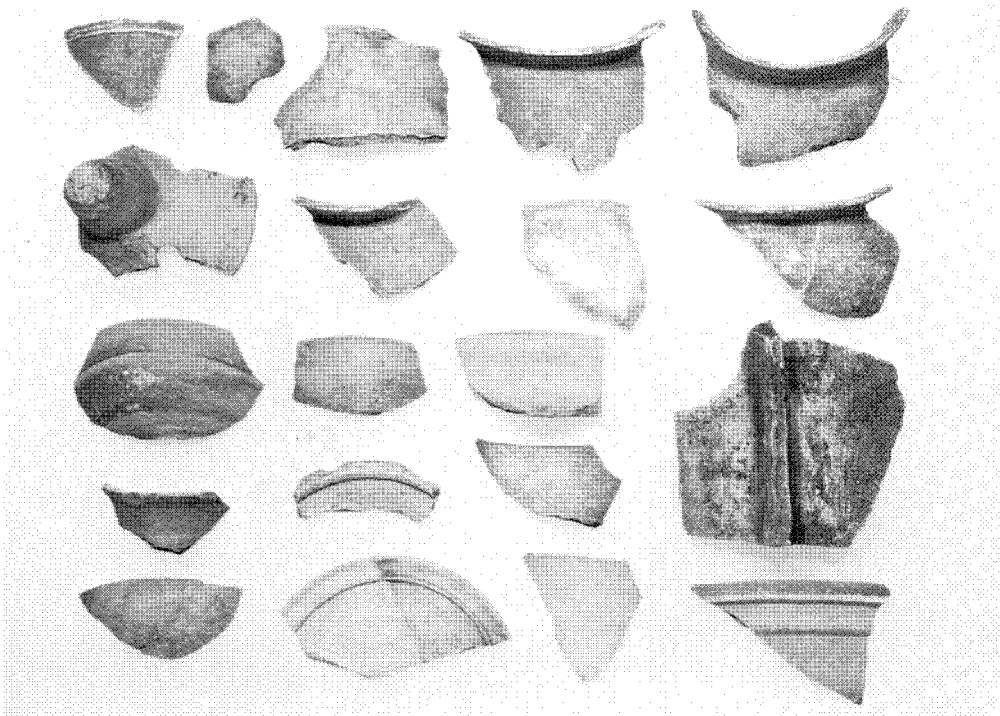
a 第1トレンチ第1層上面 奈良・平安時代遺物出土状況  
(白い矢印は三彩, 緑釉陶器片)



b 第11トレンチ土製品(縄文式土器片加工)出土状況

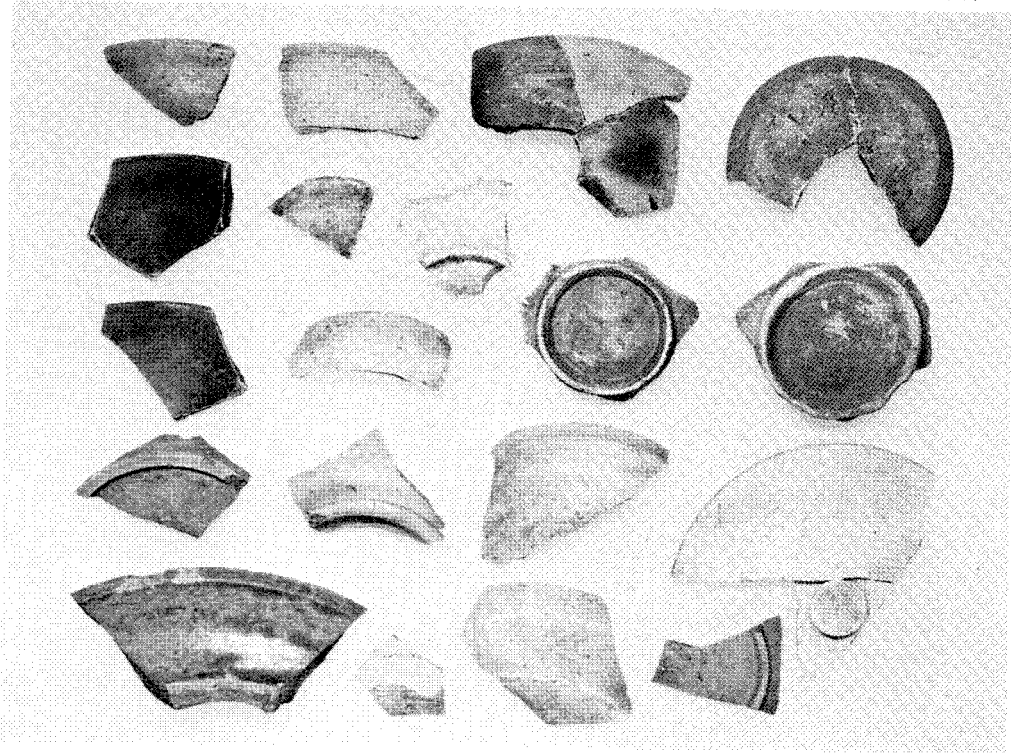


a 繩文式土器

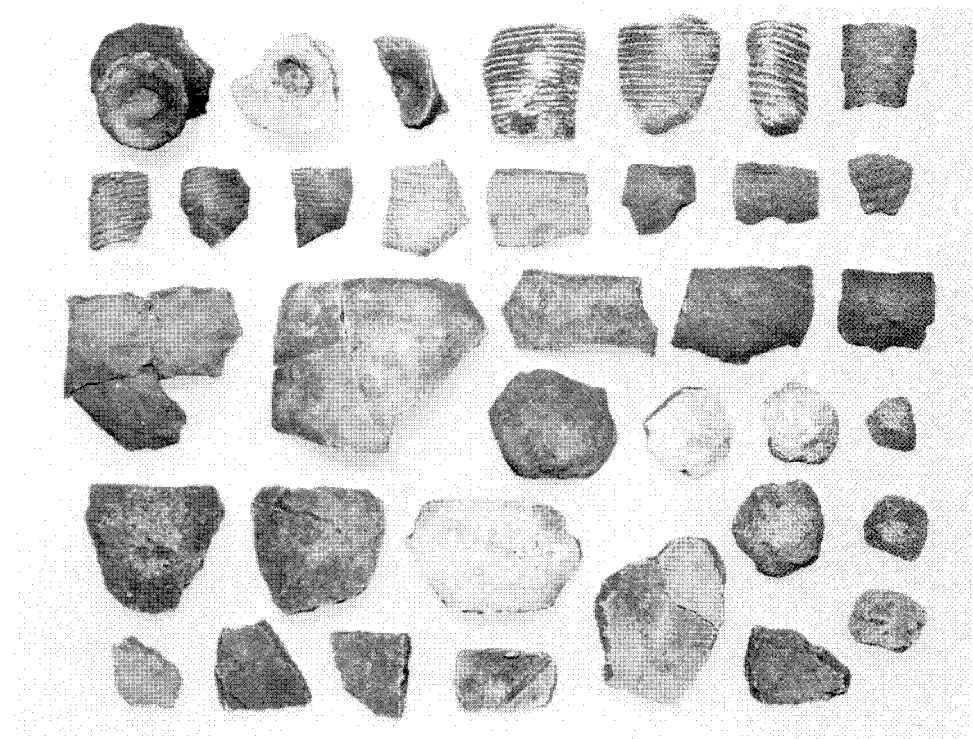


b 弥生式土器及び古墳時代土師器・須恵器





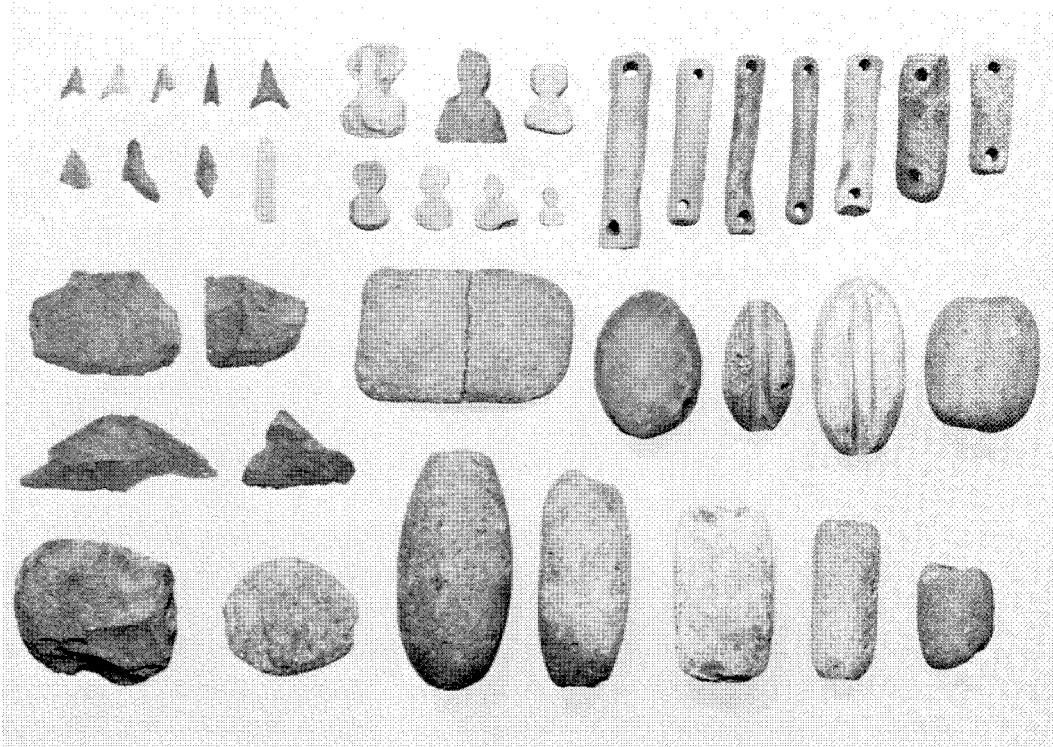
a 奈良，平安時代，鎌倉時代の土師器，瓦器，須恵器，陶磁器



b 各時期の製塩土器



a 施釉陶器片（上段左 4 点は三彩，下段右 2 点は灰釉，他は緑釉）



b 石器・土製品